本二十餘言、轉而相生、其流浸廣、粗有書記、竪讀其文」と記せる窣利に就きては從來種々の說の發表せられしに拘はらずSuγdのパーラギー形なる[56]Sūlikか或は其の梵語形なる[57]Sūhlikeか、若しくは、中世ソグド語の1派に屬する方言を、玄奘が親しく聞きて寫せる[58]Suhlか、何れかの場合に過ぎずして、要するにソグドを對象とせる名稱なること疑無きが如し、さればこゝに曰ふ二十餘言なる文字も、又ソグドの文字と解せざる可らず、但し其の二十餘言と曰ひ、又竪讀其文と記せることが玄奘の誤解に非る限は、之がこゝに謂ふ所のソグド文字を指せるものとは見る可らず、Julien及びBeal兩氏は共に明版西域記を基として窣利の字源三十二字と譯出したれば、[59]Lacouperie氏は之に從ひてIndo-Bactrianの文字の數と同一なりとし、更に竪讀其文と記せるを、右より左に讀むと解したるが如く"the reading in both [Sulek and Indo-Bactrian] is from right to left"と記し、以て兩者の同一を說き、アソカ文字は紀元二世紀に於て絕滅したりとの想像の當らざることを說き、[60]Tomaschek氏も亦同じく三十二字の記事を基として、ゼンド若しくは梵語の文字の種類に屬するものなりと考へ、[61]Bartholも此の窣利の文字といふものはシリヤ文字なること略疑無しとし、而して基督教徒の用ゐたるシリヤ字は二十二字なれば、茲に記さるゝものはAl-Nadimが亞剌比亞文字の數、即ち二十八字よりも多しと云へる摩尼教徒の用ゐたるシリヤ字なるべしと思はると說けり、其の他[62]Dronin氏[63]Marquart氏等も、各々三十二の字母を有する窣利の文字につきて說を爲したれども、然も此の字數に關しては、宋版高麗版西域記に二十餘言とあるに據るべく、[64]Chavannes氏も縮刷藏經西域記によりて既に此の事を注意せり、從て三十二言若くは三十餘言とあるを根據として試みたる論述の據る可らざるは論を俟たず。